

## 【レディサムライ直虎】企画展 一新！ 漫画4部作 完成！

あれよあれよという間に秋は深まり、暦の上ではもう立冬です。いちょうの木立は色とりどりの衣をまといはじめ、私たちの目を楽しませてくれています。浜松文芸館の展示室内にも、「女城主直虎・川名物語」が新たに加わり、江川直美先生の美しく生き生きとした漫画が室内を明るく照らしてくれています。もちろん、柴田宏祐先生作ストーリーも興味深い内容です。



浜松市北区引佐町川名の村には、直虎公の曾祖父「直平」が眠っています。井伊家の跡取りが途絶えたとき、直平は老齢の身にありながら、再び当主を務めました。当時、川名を要衝の地として重要視していた直平は、しばしば川名に滞在したといわれています。しかし、その直平も倒れ、お家の危機を憂えた直虎が立ち上がったのです。川名は直虎にとっても、亡き曾祖父の

思い出と共に大切な地でした。直虎が川名の福満寺に寄進した梵鐘には、「大檀那次郎法師」と直虎の名前が刻まれていました。漫画「川名物語」の中の1ページに幼い直虎と直親が直平に連れられて、境内で「川名ひよんどり」を見ている場面があります。今から数百年前、その光景はきっとあったことでしょう。是非、「女城主直虎4部作」を読んでみてください。皆様の心にどんな直虎像が浮かぶでしょうか。直虎だけではありません。あの時代を生きた人々の姿に思いを馳せこの浜松の歴史に迫ることも、今を生きる私たちの使命かもしれません。浜松文芸館が、今と昔をつなぐ橋渡しになれば幸いです。★直虎4部作 各一冊 100円好評販売中



## 館長のひとり言・・・遠州病院駅にて

次は遠州病院駅。ドアが開くなりたくさんの方がホームに降り立ち、改札口を目指して足早に階段を駆け下りていきます。その流れに身を投じ更に階段を降りて駅外に出ると、目に飛び込んでくるのは……。数人の方々が、毎朝早くから箒を持って周囲を掃き清めてくれているのです。実は、いつも高架下を通るたびに感心していました。前の日、駅周辺に落ちていた紙くずやたばこの吸い殻が、翌朝にはきれいになっているのです。掃除をしてくださっているのは、近くの会社の社員さんでした。その会社の社長さんの方針で行われている奉仕作業とのことです。地道にこうした活動をしながら社会に灯をともしてくださいる方々がいることに感謝します。ちなみに、浜松文芸館が入っているクリエイト浜松館内も、いつも掃除が行き届き清新な雰囲気が漂っています。それは、きっとこの館を利用してくださいる皆様がきれいに使おうと心掛けてくださっているからでしょう。自分も、落ちているゴミを拾うことから始めよう、と心に決めました。少しでもこのくすんだ心が磨かれますように祈りをこめて。

## 湖郷の詩人 清水みのる 5

浜松文芸館講演会 講師 和久田 雅之

石坂まさおの「演歌夜嘶」にみのるが、「小学校低学年の頃、オヤジの酒を買いに行って、帰り道、イタズラ半分で口をついたら、これが実にうまくてネ。一合が二合、二合が三合、飲むにつけ気持ちよくなり、とうとうタンボにひっくり返り、村中で大騒ぎになった」と語っている。やや誇張されているようだが、さもありませんと感じさせる逸話である。

家族を怒らせ心配の種だった学校一番の暴れん坊も、5年生になると人が違ったように真面目に学業に精を出すようになった。体の不自由な兄貫一に替わって、医業を継いで両親を安心させなければならなかったからである。進学先の浜松中学校（現浜松北高）は県下一、二の難関校だった。よほどの頑張りがなければ、田舎の小学校から入るのはとうてい無理であった。

師範学校を出たての優しい先生の薫陶によってか、私は五年制の終りの頃から入学準備の課外勉強に精励して、もう以前の様な野猪いのししの様な行跡をしなくなっていた。

学び疲れた後など、その若い音楽好きの先生が愛用のバイオリンを取り出してきて、中学受験で同じように課外をやっている級友二人を前にして、よく先生は「荒城の月」とか、「ユーモレスク」の曲を弾いて聴かせてくれたものである。

勿論、その曲が何んというものか、農村に育った私など知ろう筈はなく、ただ初めて聴くバイオリンの哀調をたたえたトレモロの旋律を、酔った様に聴いていたものであった。 {「思い出の記」}

受験勉強のことについてみのるは何も語っていないので正確なことはわからないが、この担任教師の特訓や二人の姉の助言や指導があったものと思われる。

頑固で真面目な村医者の家では、医学の本か学校の教科書ぐらいしか置いてなかったようで、みのるの読書といえば、床屋で見る猿飛佐助や霧隠才蔵などの忍者ものと新派悲劇、題名も忘れてしまった幾冊かの本しかなかったようだ。

昭和50年3月発行の『わが浜名湖 清水みのる詩集』は、中学校4年までの18年間を送った懐かしの湖郷を50年後に巡って、「浜名湖の昔ながらの風物と湖畔に住む人々とのつながりから、年毎に変貌してゆく沿岸の景観にも思いを寄せ、それを素直に受け止めて」うたい上げたものである。下記の詩を書いた時からさらに40数年の歳月が流れ、みのるの愛してやまなかった湖郷は大変貌を遂げ、昔日の面影を見出すことが困難になってしまった。

湖畔沿いの鄙びたこの道は 私の生家への道に通じる 古人見 大人見 佐浜 そして私の郷里  
伊左地を併せて 伊佐見村と呼んだ頃が懐しい 行きずりの人には もう顔見知り少ない  
長い歳月に流されて 知人の多くはすでにこの世を去った 残されているものといえば 半世紀  
余を経過した今も 半世紀余を経過した今も 変ることのない伊佐見村時代の 農家の佇まいのみ  
思い出をたぐりながら 干拓地の青田に聴く 蛙の啼き声も心なしか弱々しく よき時代のよき  
風物詩の影はない (以下9行略) (「鄙びた湖畔の道」)